

I 本校生活科のとらえ方

1. 生活科の基本的な考え方

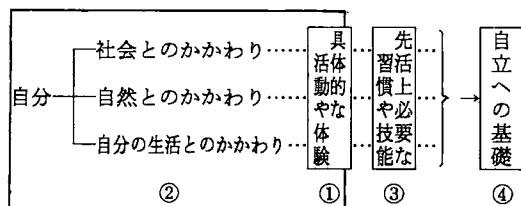
先の教育課程審議会の最終答申によれば、生活科のねらいは、次のようなものであった。

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において、生活上、必要な習慣や技能を身につかせ、自立への基礎を養うことをねらいとする。

本校では、基本的には、このねらいを受けて生活科の特性を考えてきた。その特性とは、次の4点である。

- ① 身近な社会や自然に積極的に働きかけ、それらと自分とが、かかわり合う活動や体験を通し、全身で学んでいく。
- ② 身近な環境と自分とのかかわり合いの中で生まれていく興味、関心をもとに、自分自身や自分の生活について考えていく。
- ③ ①や②のさまざまな活動や体験の過程で、生活上、必要な習慣や技能を身につけていく。
- ④ 自立への基礎を養う中核的な教科として、生活科を位置づける。

これらの特性の中でも、④は、生活科における究極的なねらいとして、私たちは、とらえている。



上図のように、①～③は、学習や生活の基礎的な能力や態度の育成を目指すものであり、それらを通じて自立への基礎を養っていくからである。

この自立とは、社会や自然とのかかわりの中で、自ら考え、自ら判断し、自らの責任において行動できることをさす。子どもたちは、今後、様々な生活場面で問題に直面していく。そのような時に、

自らの力で諸問題を解決していかなければならないのである。

ましてや、子どもたちが生きていく21世紀は、より高度な情報化社会、そして、国際化社会が展開していく時代となることは、容易に予想される。近年の科学技術の目ざましい進歩からすれば、21世紀は、人類が過去に経験したことがないような速さで、すべてのものが変化していく時代となるであろう。そのような激しい変化に対処していくためには、さまざまな変化に主体的に対応し、自らの力で解決していける、自立した人間像が求められるのである。

本校では、ここ4年間、「自己教育力の育成」という研究主題を掲げ、一学びとる力を持った子ども一〇の育成を目指してきた。学びとる力を持った子どもとは、自ら課題を求め、自分なりの方法で粘り強く追求し、より望ましい方向へ自己を変容させていくことのできる子どもということである。本校がめざす子ども像を考えた場合、自立への基礎を養っていくことをねらいとする生活科の役割は、非常に大きいものがある。

とはいえ、具体的な行動と思考が未分化な低学年児童である。はたして、自立に関する子どもたちの実態は、どうであろうか。また、子どもたちに、将来的に求めていく自立とは如何なるものであろうか。次項において、明らかにしていきたい。

2. 自立に関する実態

自立とは、先にも述べたように、社会や自然とのかかわりの中で、自ら考え、自ら判断し、自らの責任において行動できることである。この自立という観点から、目の前の低学年児童をとらえ直してみると、様相は、さまざまである。ただし、ここでは、先の項で述べた生活科の特性に沿って、見直すべき点に絞り、考えてみたい。

(1) 社会や自然とのかかわり方

子どもたちの日常生活を見ると、他児とのかかわりや協力を意識しない考え方や行動、季節感や生命観の喪失を感じざるを得ない言動に、しばしば、出くわす。自分が身のまわりの環境の中で、

どのようなかわり方で生きているのか明らかにし、どのような言動をとれば、よりよい生き方ができるのかを分かっていくことを期待したい。

(2) 主体的に取り組もうとする意欲や態度、やり遂げようとする強い意志

一つひとつの手順や方法を、すべて、他に頼らなければ、自分の考え方や行動を決定できない児童が、数多く見られる。また、限界を感じたり、飽きてしまったりして、途中で活動を投げ出してしまふ場面に、たびたび、出会う。やはり、自己肯定や自己否定を繰り返して、自己を規制し決定していく姿を望みたい。

(3) 基本的生活習慣や技能

この問題に関しては、まず、自分自身の健康や安全への配慮が不十分であることが言える。例えば、健康面では、食事や睡眠時間などの不規則さ、安全面では、通学時の交通安全や遊具の使い方などを見た場合、このようにすればよいという知識は持っていますが、関心度が低かったり、実行が伴わなかったりすることが多いのである。

そのほか、身近な人々との接し方や公共物の利用の仕方、手の技能など、見直すべき点は、山積みされている。

本来、これらの事は、学校教育のみで改善していけるものではない。各家庭においても、当然、身につけさせたいものとして重視しているはずである。にもかかわらず、十分に身につけていないことを考えれば、ここで改めて問わなければならない問題であろう。

(4) 自分自身や自分の生活について考えること

このことは、自己認識にかかわる問題である。

自己認識とは、自分の長所や短所を知るとともに、他者についての理解を深め、今まで以上に自分自身を知り、自分自身の存在感や自信を持つことである。生活科の学習は、まさに、自己認識を成していく過程といえる。自己認識が成された自分の見方・考え方で事を決定していくことこそ、私たちが願う姿なのである。

しかしながら、現実の児童は、自己認識が深まっていないために、先にも述べた社会や自然と

のかかわり方に、いくつかの問題点を抱え、主体的な行動力、意志力が不足している。

自分の成長の記録や自分の長所や特技、或いは、自分ができるようになったことなどの学習を通じ、社会や自然とのかかわりにおいて、自分自身や自分の生活を認識していけるような過程を設定したいものである。

ここまで述べてきた自立に関する本校低学年児童の実態は、これまでの学習経験や既存の生活経験からすれば、当然のことかもしれない。

しかしながら、この現実の低学年児童の実態を見過ごすわけにはいかない。なぜならば、身近な環境と自分とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えていくことが、自立への基礎を養っていくことにつながるからである。

3. めざす子ども像

本校では、このような低学年児童の実態を踏まえ、めざす子ども像を次のように設定した。

——環境に主体的に働きかけていく子ども——

身近な社会や自然に主体的に働きかけることによって、自他の良さに気づき、自信を持って生活できる子ども

「身近な社会や自然に主体的に働きかける」とは、身近な社会現象や自然現象をありのままにとらえたり、積極的に工夫や改善を加えたりすることである。特に、本校では、1学年においては、身近な社会や自然をありのままにとらえたり、敏感に感じとったりすること。さらに、2学年においては、見出した問題点などを、自分なりの見方や考え方で積極的に工夫・改善していくことに重点を置いて考えている。

また、「自他の良さに気づき、自信を持って生活できる」とは、環境に主体的に働きかける活動の過程で、自他ともの理解を深め、自己の存在感や意味を再確認していくことで自らの生活に自信を持つことであると考えた。

では、このめざす子ども像を真に実現していくための本年度の取り組みを、次章において明らかにしていきたい。